琉球大学学術リポジトリ

# 旧南洋群島における混血児のアソシエーション－パラオ・サクラ会



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 琉球大学移民研究センター |
| | 公開日: 2018-11-13 |
| | キーワード (Ja): 日本人移住者, 混血児, 学校教育, 慰霊祭, パラオ・サクラ会 |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 飯髙, 伸五, Iitaka, Shingo |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002010140 |

# 旧南洋群島における混血児のアソシエーション—パラオ・サクラ会

飯 髙 伸 五

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．用語法および先行研究の検討
Ⅲ．南洋群島における混血児の処遇
Ⅳ．パラオ・サクラ会
Ⅴ．親日家という言説
Ⅵ．考察—パラオ人と日本人の狭間で
Ⅶ．おわりに

**キーワード**：日本人移住者，混血児，学校教育，慰霊祭，パラオ・サクラ会

## Ⅰ．はじめに

日本統治下の南洋群島には「島民」とよばれた現地人を遥かに凌駕する日本人が移住していった[1)]。南洋庁が設立された1922年の時点では，4万7,713人を数えた「島民」に対して日本人移住者数は3,310人に過ぎなかったが，1935年には「島民」を凌駕する5万1,861人，1939年には「島民」のほぼ1.5倍の7万7,257人にまで達した（南洋庁1937；1941）。これにともない，南洋群島の各地には移住した日本人男性と現地人女性との間に少なからず混血児が誕生した。かれらのなかには，戦後の歴史過程のなかで政治的，経済的に成功した人物も多く存在した（Peattie 1988：317; MARC 1986：63）。とりわけ，ミクロネシア連邦のトシヲ・ナカヤマ（Tosiwo Nakayama），マーシャル諸島共和国のアマタ・カブア（Amata Kabua），パラオ共和国のクニヲ・ナカムラ（Kuniwo Nakamura）らのように，戦後の国家形成期に大統領にまで上り詰めた政治家もいる[2)]。日本側でも，かれらは「日系人の政治家」としてよく知られており，日本との友好関係を築くための懸け橋のような存在として位置づけられている[3)]。

本稿の目的は，日本統治下の南洋群島の中心地であったパラオにおいて，日本人移住者の男性と現地人の女性との間に生まれた混血児が，統治政策上いかに位置づけられてきたのか，また日本に辿れる自らの出自をいかに位置づけてきたのかを検討することにある。とりわけ，1960年代半ばに日本からの慰霊団の受け入れを主要目的のひとつに掲げて設立されたパラオ・サクラ会（*Palau Sakura Kai*: Palau Cherry Blossom Association）という混血児のアソシエーションに注目する。事例の検討を通じて，パラオの混血児は明確なエスニック・アイデンティティを保持しているわけではないが，日本に辿れる出自を

一時的ではあるが集合的に想起していることをあきらかにする。

以下，Ⅱでは混血児をめぐる用語法の検討および先行研究の整理を行う。Ⅲでは，統治者側が旧南洋群島の混血児をいかに位置づけてきたかを検討し，Ⅳではパラオ・サクラ会設立の目的，会員の構成，主要会員の日本との関係を検討する。Ⅴでは，パラオ・サクラ会を親日家の集まりであるとする日本側の慰霊団の報告を批判的に検討する。Ⅵの考察では，パラオ人と日本人の狭間におかれた混血児が，日本に辿れる自らの出自を想起することにはいかなる意味があるのかを検討する。

## Ⅱ．用語法および先行研究の検討

### 1．用語法

本稿では，旧南洋群島において，日本人男性と現地人女性との間に生まれた人々を混血児と呼ぶ。混血児という用語は日本統治期の史資料のなかで頻繁に用いられてきた。しかし，混血児というカテゴリーは，日本統治期においても，戦後のアメリカ統治期から独立国家が形成された現在においても，行政によるセンサスのなかで集団として実体化されてきたわけではない。本稿では，あくまで便宜的な記述用語としてこの用語を用いる。

類似の用語として日系人という用語があるが，本稿ではこの用語を地の文で用いるのを避ける。日系人という用語は外国に移民した日本人の子孫を指すために広く用いられてきたが，日本統治期下の南洋群島では日本人男性と現地人女性との間に生まれた人々を指し示す用語としては使用されなかった。日系人という用語が南洋群島の混血児に充てられるようになったのは，戦後になってからである。本稿では，戦後における人々の言説や団体名称の記述などに限って日系人という用語を用いる。

また，民俗概念としてみた場合，誰が日系人であるかは，移住先の政治経済的情勢や当事者の描く文化的自画像が複雑に絡み合って立ち現れてくる（前山 2001：382)。現在，旧南洋群島には，日系人を自称する人々や団体が存在する一方で，日本に辿れる自らの出自を声高に主張しない人もいる。本稿では，日系人に相当する民俗語彙を括弧付きで表記しておく。パラオでは「ハーフ」(half) といった英語のほか，「アイノコ」(*ainoko*)，「ニセイ」(*nisei*)，「ニッケイ」(*nikkei*) などの日本語からの借用語が用いられている。

### 2．先行研究

南洋群島の混血児を対象とした先行研究は概して少なく，日本人研究者によるものがほとんどである。その理由としては，混血児を対象とした明確な施策がなかったために史資料が希少であるのに加え，混血児の多くが日本語話者であり，時に日本人の調査者に親近感を抱くことなどがあげられる[4)]。主な先行研究には，(1) 混血児に関する戦前の自然人

類学者の言説を分析した科学史の研究，(2) 混血児の政治家や有力者の生活史を追ったノンフィクションおよび文化人類学，政治学の研究，(3) 日本人子弟向けの小学校に通った混血児のオーラルヒストリーを収集した歴史学の研究，(4) 日本からの慰霊団，遺骨収集団の訪問に対する混血児の対応を対象とした文化人類学の研究などがある。

(1) の研究には，坂野徹によるものがある（坂野 1997；2005)。坂野によれば，大東亜共栄圏というスローガンが掲げられるようになった 1940 年以降，自然人類学者は日本の南方進出に伴う「混血児」の増加を，優生学的な観点から日本人の純血性の攪乱として問題視するようになったという。例えば，長谷部言人は，外地生まれの「混血児」は世代を重ねるごとに現地人と一体化してしまうため，皇民化が困難になると指摘した。こうした主張は，大東亜共栄圏の版図内の多様な民族集団を包摂しようとした当時の統治政策と矛盾するが（cf. 小熊 1995)，「混血児」の増加が日本人の自己同一性を脅かす問題として議論されていたことは注目に値する（坂野 2005：445)。

(2) の研究には，日本人移住者と現地の伝統的首長の娘との間に生まれた混血児に注目した研究がある。マーク・ピーティー (Peattie 1988)，高知新聞社（1998)，小松和彦（2001）らの研究は，トラック（Truk）諸島のモエン（Moen）島を中心にコプラの仲買や雑貨の販売を手がけていた高知県出身の森小弁が，事業に成功をおさめて有力者となっていく過程，かれと現地の伝統的首長の娘との間に生まれた子どもとその子孫が一大勢力となっていく過程を追っている。また，小林泉の研究では（2007)，トラック諸島に渡った日本人貿易商と水曜島 [5] の伝統的首長の娘との間に生まれたススム・アイザワ（Susumu Aizawa）が，日本へ渡って戦後プロ野球選手となり，故郷に帰還後は伝統的首長の称号を継承し，現地社会のリーダーとなるまでの経緯が記述されている。

さらに，小林泉は，混血の度合いや人々の意識如何に関わらず，現在のミクロネシアにおいて「日本人の血を引く人々」[6] が現住人口に占める割合をアンケート調査やインタビューから概算している（太平洋島嶼地域研究所 2003；2004；小林 2007)。それによれば，現在のミクロネシア連邦のチューク（Chuuk；旧トラック）州では，日本統治期に単身渡航者が多く，日本兵が駐留したこともあり，2000 年の時点で総人口 5 万 3,285 人の 3 割以上もが，何らかのかたちで「日本人の血を引く人々」と推定されるという（小林 2007：99)。その一方で，日本人移住者が最も多かった北マリアナ諸島では，世帯単位での移住が多かったために，「日本人の血を引く人々」の割合は少ないという。

(3) の研究にはグアム大学のミクロネシア地域研究センター（Micronesia Area Research Center）のドナルド・シュスター（Donald Shuster）や樋口和佳子らによって行われた，パラオ人のオーラルヒストリー研究がある。それによれば，日本統治期に日本人子弟向けの小学校に通った経験のある混血児は，学校で「島民」として差別された経験を語る場合もあったという（MARC 1986：62-63)。また，ピーティーは，旧南洋群島の

混血児の多くが戦後において政治的，経済的に成功しているのは，日本統治期に日本人子弟向けの小学校に通い，中等教育を受ける機会に恵まれていたためであると述べている（Peattie 1988：317）。

（4）の研究には，マーシャル諸島で遺骨収集を行う日本人の遺族会，および遺族会を現地で支援してきた混血児のアソシエーションであるマーシャル日系人会（*Marshall Nikkeijin Kai*）に注目した黒崎岳大の研究がある（黒崎 2007）。近代日本では戦死者の遺骨に特別な意味が付与されていったのに対して，マーシャルでは遺骨は「道ばたに落ちている石」同然のものであった。しかし，遺骨収集活動を通じて，遺族会は遺骨を「マーシャル人と日本人の友好関係を示すシンボル」として，マーシャル日系人会は遺骨を「自らの中にある日本人としてのアイデンティティを再確認するシンボル」として意味づけていったという（黒崎 2007：18）。

本稿は，これらの先行研究と多くの問題関心を共有しつつも，学的言説の分析に留まらず，混血児の養育をめぐる論争を検討している点，（4）で提示された事例と比較可能なパラオの事例に注目している点において独自性を持つ。また，（3）の研究では，僅かな混血児の事例から一般化がなされているのに対して，本稿では現地人として養育された混血児の事例も含めて多様な事例を検討している。さらに，本稿は混血児のエスニック・アイデンティティのゆらぎを射程に入れた分析を行っている点でも独自性を持つ。

## Ⅲ．南洋群島における混血児の処遇

### 1．混血児の誕生

南洋群島は，大日本帝国憲法の適用されない外地であったため，「島民」―スペイン人との混血によって比較的「進歩」しているとされたマリアナ諸島の現地人チャモロと，それ以外の地域に居住する「未開種族」であるとされた「カナカ」[7]とに分類された―は日本国籍を付与されなかった（南洋庁長官官房 1932：11）。同時に，「島民」は文化的同化の対象とされたが，限定的な教育制度のもとにおかれ，高等教育への道は閉ざされていた。「島民」子弟は日本人子弟とは別の公学校において[8]，本科3年，補習科2年の課程で，日本語および実用的な知識や技能の習得を求められた[9]。

このように制度面において「島民」と日本人は明確に弁別されていたが，実生活では両者は様々な接触状況に置かれていた（飯髙 2006a；2009）[10]。混血児の誕生は，統治者が意図せざる「島民」と日本人との接触状況のうち，セクシャリティの領域における接触状況に起因する。混血児のほぼすべては日本人男性―単身の移住者のほか官吏や軍人など―と「島民」女性との間に生まれた人々であった[11]。その実数はさほど多くはないものの，混血児の存在は次第に顕在化していったと考えられる。1930年代初頭には「群島のどの島へ行っても，日本人との間に生まれた混血児を見ないことはなかった」と報告されてい

る程である（能仲 1990：85）。

行政の中心地となったパラオ支庁管内では，1922年に585人にすぎなかった日本人は，1935年にパラオ人人口を上回る6,553人，1939年に2万人を超えた[12]。南洋庁が設置されたコロールは，様々な商店が建ち並ぶ日本人の町としての概観を呈していった（Peattie 1988：153-197）。パラオに居住していた日本人移住者は，役所勤務の公務員のほか，コロールの商店経営者，村落部で農地開拓に従事する農民，鉱山採掘に従事する労働者，カツオ漁や真珠貝採取などに従事する漁民など様々であった。

南洋群島で最も日本人移住者数が多かったサイパン支庁管内では，世帯単位での移住が主流であったために混血児はあまり多くなかったが，パラオ支庁管内からは混血児が多く生まれたといわれている（小林 2007：86）。パラオにおける混血児の実数とその推移は定かではないが，1933年4月付けのコロール公学校の『本校概況書』[13]には，当時の同校就学者に占める混血児の実数が明記されている（表1）。

それによれば，コロール公学校の本科の全児童 124 人に占める混血児の割合は，約8.9%の合計11人であった。その内訳は，第1学年は「カナカ」の児童38人に対して混血児2人，本科第2学年は「カナカ」の児童42人に対して混血児6人，本科第3学年は「カナカ」の児童44人に対して混血児3人であった。また，コロール公学校の補習科の全児童 116 人に占める混血児の割合は約4.3%の合計5人であった。その内訳は，第1学年はチャモロの児童2人と「カナカ」の児童66人に対して混血児2人，第2学年は，チャモロの児童1人と「カナカ」の児童47人に対して混血児3人であった。

補習科における混血児の割合が，本科における割合に比して半減する理由は，コロール以外の公学校本科卒業生に占める混血児の割合が少なかったためであると推測される。コロール公学校の補習科には，コロール公学校のほか，マルキョク公学校，ガラルド公学校，ペリリュー公学校，アンガウル公学校の5校の本科の卒業生の一部が進学した。1930年代初頭の時点では，日本人の町が形成されていたコロールのほか，燐鉱採掘が行われてい

**表1　コロール公学校における混血児数とその割合（1933年4月時点）**

| | | 児童数（人） | | 混血児数（人） | 混血児数／児童数 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | チャモロ | 「カナカ」 | | |
| 本科 | 第1学年 | 0 | 38 | 2 | 0.053 |
| | 第2学年 | 0 | 42 | 6 | 0.143 |
| | 第3学年 | 0 | 44 | 3 | 0.068 |
| | 合計 | 0 | 124 | 11 | 0.089 |
| 補習科 | 第1学年 | 2 | 66 | 2 | 0.029 |
| | 第2学年 | 1 | 47 | 3 | 0.063 |
| | 合計 | 3 | 113 | 5 | 0.043 |

資料：コロール公学校『本校概況書』より作成。

たアンガウル島にも日本人移住者が流入していたが，ペリリュー，マルキョク，ガラルドに居住する移住者数は僅かであった[14]。こうした村落ごとの日本人移住者数の相違が，コロールの本科と補習科における混血児の割合の相違に反映されている。

## 2. 混血児の養育問題

コロール公学校による『本校概況書』に示されているように，多くの場合，混血児は現地人の母のもとで養育され，「島民」子弟向けの公学校に通っていた。これは，混血児の多くが非嫡出子であり，日本人の父によって日本国籍取得の便宜を図られなかったことを示している。同時に，混血児のなかには，日本人の父の戸籍に入れられ，現地の日本人子弟向けの小学校に通った者もいた。このように，南洋群島では混血児に対する明確な施策が存在しなかったこともあり，その処遇は一定ではなかった。

日本側のメディアにおいては，曖昧な存在であった混血児をいかに養育するかが社会問題として議論の遡上にのぼることがあった。1930 年代初頭に南洋群島の各地を踏査した著述家の能仲文夫によれば，混血児は「日本人の血が流れているのだと云って」，結婚相手に「カナカ」ではなく日本人を望んでいるが，日本人は混血児との結婚を望まないため，混血児は「カナカにもなり切れず，さりとて，日本人にもなり切れず，中途半端な人間になって自暴自棄に陥るものが非常に多い」という（能仲 1990：84)。はたして当時の混血児が「日本人の血」が流れているという認識を持っていたのか，結婚相手に日本人を望んでいたのかなど，能仲の報告の妥当性に関しては検討の余地がある。ただ，少なくとも，1930 年代初頭の時点で，混血児が「中途半端」な存在，日本人になり切れない存在として日本人から問題視されていたことがわかる。

1940 年代になると，混血児を日本人として養育すべきだという見解が出てくる[15]。パラオのコロールで現地出版物の編集を行っていた野口正章は，日本人の父とパラオ人の母とが別居している混血児の家庭環境を批判し，混血児の養育にあたっては「日本人としての種」を重視すべきであると主張している（野口 1941：84)。野口は，日本人移住者がさほど多くない時期には混血児を「島民」として養育する方が得策であったが，内地人が「島民」を凌駕した現在では，混血児が「心なき内地人にジロジロと見られる」ことが，かれらの幸福を脅かすと主張する。そして，混血児の養育は「むしろ一般的に文化の高い，日本人としてであった方がいいのではないか」と述べている（野口 1941：85)。このような同化主義的な言説は，現地人と一体化した混血児を皇民化が容易ではない厄介な存在として問題視した同時期の自然人類学者の言説（坂野 2005：445）と軌を一にするもので，総動員態勢の只中にあった時局の喫緊を多分に反映している。

さらに，日本人として養育された結果，極めて秀逸な才能を発揮した混血児の存在も報告されている。先に引用した能仲によれば，小笠原出身の父とペリリュー（Peleliu）島の

伝統的首長の娘との間に生まれた混血児の女性 TY は父の戸籍に入れられ，コロールの小学校を卒業後は小笠原に滞在し，その後は高等科をも卒業したという。TY は「小笠原の学校に在学中は抜群の成績で，八年間首席で押し通し，教師もその頭脳のよさには舌を捲いた」ほどで，「畏しくも恩賜賞さえ授与された」（能仲 1990：85）。さらに，TY は語学に堪能で「日本語は下手な日本人よりもっと上手に使い分ける」だけでなく，「英語は勿論，独逸語，スペイン語，チャモロ語，カナカ語はいうに及ばず，どれも完全に使いこなせるようになった」（能仲 1990：86）とさえ能仲はいう。

能仲の報告は多分に誇張されているが，混血児でも「若し適当に指導さえしてゆけばどれ程伸びる」のかを示すために，この事例が紹介されている。TY は依然として混血児であるが故の差別的な処遇に直面しているというが（能仲 1990：86）[16]，混血児の養育問題を日本人の自己同一性の問題ととらえる論客にとって，父の戸籍に入り，日本人子弟の通う学校でも優秀な成績を収めた TY のような存在は，混血児養育の模範的な事例ととらえられたといえよう。

### 3. 日本人移住者の引き揚げ

日本統治期末期には，南洋群島にも太平洋戦争の影が忍び寄ってきた。ミッドウェー海戦敗北後は，島々の総動員態勢構築のため，日本人の年長者や婦女子は内地への疎開を余儀なくされるとともに（今泉 2005：10），日本人の成年男子のなかには現地召集される者もいた。同時に「島民」も様々なかたちで戦争に巻き込まれていった。パラオでは，日本国籍を持たない「島民」男性であっても，ニューギニア調査隊，挺身隊，キリコミ隊などに所属する軍属として動員されることがあった。父の戸籍に入っていた混血児の場合は，他の日本人と同様に現地召集を受け，入隊を余儀なくされることもあった。

太平洋戦争で日本が敗戦すると，日本統治下で南洋群島に移住したすべての非現地人は退去を命じられた[17]。これにともない，父の戸籍に入っていなかった混血児は，母とともに現地に残されることになった。一方で，現地人女性と結婚していた日本人も例外なく引き揚げなければならなかったが，その妻と子供は，現地に残留するか日本への引き揚げに同伴するかの選択をすることができた（Richards 1957:38）。このため，父の戸籍に入っていた混血児のなかには，まだ見たことがない内地へ「引き揚げ」た者もいる。

父とともに引き揚げた混血児のなかには，日本で生涯を終えた者もいるが，程なくして出生地の島々へ帰還した者が多かった。のちにパラオ共和国の大統領となったクニヲ・ナカムラ（1943 年生）は終戦後，船大工であった日本人の父，パラオ人の母，数名のキョウダイとともに内地に引き揚げたが，程なくして一家でパラオに帰還している（セイソン 2001:8）。当時を述懐したクニヲの兄，ダイジロウ・ナカムラ（Daiziro Nakamura；現

駐日特命全権大使）は「我々が日本人であることが問題でした。母は東京のダグラス・マッカーサー総司令部へ行って書類を準備しなければなりませんでした」と述べている（セイソン 2001:8)。

また，日本と現地にキョウダイが別れ別れになることもあった。パラオに移住したAZ一家―コプラの仲買をしていた日本人の父，パラオ人の母，そして9人の子供から構成されていた―の場合，終戦時にすでに長女は死亡していたが，小学校に通っていた年長の4人のキョウダイは父とともに日本に渡り，学齢期に満たない年少の4人のキョウダイは母とともにパラオに残された。日本に渡った4人はその後も日本に留まったが，現在でもパラオを訪れて母の墓参りを行い，パラオに残ったキョウダイとの交流を続けている。

以上のように，日本人移住者の引き揚げは，南洋群島の混血児にとって，生活基盤，社会基盤の大きな変化を意味した。父の戸籍に入っていなかった混血児は父の不在に直面し，父の戸籍に入っていた混血児もまた馴れない日本への「引き揚げ」，母やキョウダイとの離別を経験した。いずれの場合も強制移住と類似の経験であったといえよう。かれらは，その後も個別の状況に応じた適応を迫られ，国家による補償や支援を享受することはなかった。

## Ⅳ．パラオ・サクラ会

戦後の旧南洋群島は，日本統治期とは全く異なる体制のもとに置かれた。まず，アメリカ統治下では，日本統治期のような経済開発は行われなかった。日本統治下では「島民」は日本人移住者によって行われた経済開発の周縁部で，土地のリース，鉱山への出稼ぎ，都市部での就労などによって現金収入を得ていたが（飯髙 2009)，アメリカ統治下ではこうした機会はなくなった。また，1960年代後半以降，アメリカは冷戦構造下の戦略構想のもとで，民主政治の整備，平和部隊（Peace Corps）の投入，都市部のインフラ構築，学生のアメリカ留学などの政策を推進した。この時期，新しいリーダーに求められたのは，英語でのコミュニケーション能力やアメリカ型の民主政治の理解であり，日本統治期に受けた教育が直接的に活用される機会は失われた。

体制が180度転換した戦後において，旧南洋群島の混血児は，非混血児とは異なる方法で日本統治経験を対象化するようになった（黒崎 2007)。パラオでは，1960年代半ばにコロール近郊に居住していた混血児を中心として，パラオ・サクラ会が設立された。

### 1．設立の経緯と目的

パラオ・サクラ会設立時の主要会員のほとんどは既に死去しているが，2008年に筆者がインタビューを行ったUK（1931年生，男性）は創設者の一人で，1960年代後半から30年以上にわたりパラオ・サクラ会の会長職にあった人物である。UKによれば，パラオ・

**写真 1：コロールの日本人墓地にある混血児の墓（2008 年 11 月，筆者撮影）**

サクラ会の設立目的は，第一に日本からの慰霊団の受け入れ体制を整えること，第二に日本にいるはずの混血児の肉親を探すこと，第三に混血児同士で相互扶助を行うことなどであった。

第一の点に関していえば，混血児は肉親と生き別れになっている者も多かったために，日本人のパラオ再訪には興味を抱いていたという。実際，1960 年代後半以降，日本からの慰霊団の訪問が可能になったのは，確かにパラオ・サクラ会の援助に負うところが大きかった。当時は日本人の渡航が容易でなかったため，渡航手続や宿泊施設の手配など，様々な便宜を取り計らう現地人の協力者が必要であった。当時 UK は信託統治領パラオ地区の議員であったために，慰霊団の受け入れ体制を整備するには格好の立場にいた。

また，慰霊団の悲願であった慰霊碑の建立には，かれらを支援するパラオ人が土地用益の許可申請を行う必要があった。パラオ・サクラ会は，コロールの日本人墓地（海軍墓地）—1914 年の日本海軍による占領時に接収された土地で，後に日本人移住者の墓地となった—のほか，激戦地であったペリリュー，アンガウルなどに慰霊碑を建立するための諸手続を行っている。慰霊碑のなかには，日本の慰霊団とパラオ・サクラ会の連名で建立されたものも多くある。パラオ・サクラ会の会員のなかには，日本人墓地に埋葬されている者もいる（写真 1）。

第二の点は，第一の点と密接に連動していた。パラオの混血児にとって，日本に引き揚げた父および父の親戚やその子孫との関係，生き別れになったキョウダイとの関係を再構築することは共通の関心事であった。同時に，混血児は戦後パラオに「残された移住者」

―戦中と戦後の混乱のなかで両親とともに引き揚げることが出来ずに，パラオ人に養取された日本人―の親戚を捜すことにも協力した。「残された移住者」は戦後パラオ人として生活してきたが，混血児に親近感を持つ者も多く，パラオ・サクラ会に入会する者もいた。

第三の点に関していえば，父の戸籍に入っていなかった混血児の場合は，戦後の父の引き揚げに伴う生活基盤の変化，父の戸籍に入っていた混血児の場合は，日本への引き揚げとパラオへの帰還後の疎外感などが深く影響している。また，後述するように，父の戸籍に入っていた混血児は，日本人から「島民」と呼ばれたり，パラオ人から「日本人」と呼ばれたりして差別された経験を持っている。こうした苦難の経験から，混血児は相互扶助を行う必要性を感じていたという。

以上から，パラオ・サクラ会は，慰霊団の受け入れという対外的な対応と同時に，自らの肉親捜しや相互扶助など対内的な対応をも目標に掲げて設立されたアソシエーションであったことがわかる。会員はこれらの目的の遂行のために，毎月ミーティングを行い，少額ながらも会費を徴収し，積み立てていた。一方でメンバーシップに関する明確な規定はなく，会員にならない混血児もいれば，趣旨に賛同して会員となる非混血児のパラオ人や現地滞在の日本人もいたという。

## 2. 会員の構成

パラオ・サクラ会の設立を主導した混血児はUKのほかにも数名いた。設立時に最年長だったのは日本海軍の占領直後から1920年代初頭までに生まれた人々であった。男性の最年長MR（1910年代生）は，日本軍将校を父に持ち，日本統治期に公学校を卒業した経歴を持つ。MRの妻もまた混血児であったが，かれらの娘は後にパラオ高校（Palau High Scholl）の教員となり，戦後生まれの若い生徒を慰霊祭に出席させている。また，女性の最年長は，前章で検討した能仲の記述（能仲 1990）に現れるTY（1916年生）であった。TYは1990年代末に至るまで，やはり混血児であった夫のSG（1920年生）とともに，出身地であるペリリューにおける慰霊祭の実施，慰霊碑の建立に尽力した。

さらに，日本人の父の戸籍に入り，太平洋戦争期に現地召集を受けた経験のある混血児の男性YNとIWも創設者に名を連ねていた。YN（1920年生）は最初期にパラオに渡った日本人移住者の父を持ち，日本統治期には小学校に通っていた。パラオ・サクラ会設立当時は，信託統治領パラオ地区の行政上の要職に就いていたため，混血児に様々な職業を斡旋したという。IW（1920年代生）はコロール小学校卒業後，サイパンの実業学校に進学した経験を持つ。YNとともにパラオ・サクラ会の活動に積極的に参加し，日本人の軍人・軍属との親交も深かったという[18]。

このほかにも，日本人の父の戸籍には入らずに公学校に通っていた混血児3名（AD，AS，SK）が，創設者に名を連ねていた。そのうちの1人ADは，母がコロールの伝統的

首長を輩出する親族集団（*kebliil*）の出身で，現在ではその子弟がコロールの日本人墓地の管理に尽力している。以上，UK を含めて創設者は 9 名となる。後述するように，日本からの慰霊団の報告では，1968 年の時点でパラオ・サクラ会の会員数は 50 名程度と報告されていることから（日本サクラ会 1968：156），以上の 9 名を中心に，そのほかの混血児，かれらの配偶者や子ども，「残された移住者」などが加わっていたと考えられる。

1993 年に沖縄パラオ会—パラオに居住していた沖縄出身者のアソシエーションで，1970 年代後半から近年に至るまでパラオへの慰霊団を組織してきた[19]—によって作成された資料には，その当時のパラオ・サクラ会の会員のリストが明示されている（沖縄パラオ会 1993：171-172, 180）。筆者による聞き取り調査の結果，63 名にのぼる全会員の内訳は日本人の父とパラオ人の母との間に生まれた混血児 33 名，混血児の父ないし母を持つパラオ人（以下，第 3 世代）10 名，非混血のパラオ人 5 名，「残された移住者」4 名，戦後パラオやグアムに在留していた日本人（以下，在留日本人）11 名であった（表 2）。

混血児 33 名のうち日本人子弟向けの小学校，国民学校で教育を受けた者が 8 名も存在した（表 2）。混血児の多くが公学校に通っていたことを考慮すれば，パラオ・サクラ会会員の混血児に占める小学校，国民学校の就学者の割合は高いといえる。これは，非嫡出子の混血児とその子どものなかにはパラオ・サクラ会に参加しない者も少なくなかったことを示している。さらに，混血児に加えて日本統治期を直接は知らない第 3 世代，とりわけ MR，YN，IW などこの時点で死去していた創設者の子どもが，親を引き継ぐようなかたちで会員に加わっていることも注目に値する。

また，63 名の会員のうち夫婦会員が 10 組いたが，そのうち混血児同士および混血児と第 3 世代の夫婦は UK とその妻，TY と SG 夫妻など 3 組いた。この時点では既に死去していた MR とその妻も混血児同士の夫婦であった。実際にはパラオ人と結婚している混血児の割合が最も多いと推測されるが，混血児同士および混血児と第 3 世代の結婚は，パラ

**表 2　パラオ・サクラ会の会員構成（1993 年時点）**

| | 会員数（人） | 日本統治期に通学した混血児（人） | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 公学校 | 小学校・国民学校 | 公学校と小学校・国民学校の双方 |
| 混血児 | 33 | 25 | 7 | 1 |
| 第 3 世代 | 10 | — | — | — |
| 非混血のパラオ人 | 5 | — | — | — |
| 「残された移住者」 | 4 | — | — | — |
| 在留日本人 | 11 | — | — | — |
| 合　計 | 63 | — | — | — |

資料：沖縄パラオ会(1993)および聞き取り調査より作成。

オ・サクラ会の設立目的のひとつであった相互扶助に寄与していたと考えられる。また，混血児ないしパラオ人と在留日本人との夫婦会員が5組も存在した。このことから，この時期には増加しつつあった在留日本人の存在も見逃せない存在になっていたと考えられる[20]。かれらのなかには，日本統治期をパラオで過ごし，戦後の引き揚げを経て再びパラオに戻って来た者もいた。

### 3. 主要会員と日本との関係

以下では，筆者が調査を行った時点でパラオ・サクラ会の主要会員であった3名の混血児—創設者であったUKとSG，および1980年代に会員となったFM（1931年生，女性）—を取り上げる。この3名を抽出した理由は，日本統治期に受けた教育がそれぞれに異なり，現在に至るまでの生活史にも多様性が認められるとともに，日本に辿れる自らの出自の位置づけも一様ではないからである。

【事例1】UK（1931年生，男性）

UKの父はフィリピンや上海に在留した後に，海軍による南洋群島占領とほぼ同時期にパラオに渡った。パラオでは材木や漁業関係の仕事を中心に，植物の標本を内地の大学に送る仕事などにも従事していた。長男であったUKは，父の戸籍に入り，日本人子弟向けのコロール小学校に通っていた。UKは小学校では日本人の生徒から「島民」と呼ばれ，学校の外ではパラオ人の子どもから「日本人」と呼ばれた。当時，日本人から「島民」と呼ばれた場合には，強い差別的な含意が込められていたため，同級生とよく喧嘩をした。

卒業後は新設されたばかりのパラオ中学校に進学したが，この頃には気心の知れた日本人の友人もでき，差別されることはなかったという。戦後に慰霊団としてパラオを訪問するようになった日本人には，パラオ中学校時代の同級生もいる。なお，UKの弟は，出生時に既に父が死去していたこともあり，母方のパラオ人の家庭で養育されていた。しかし，8歳になったとき，日本人の役人がやって来て，小学校に入学させるように命じたという。UKの弟は日本語がほとんど話せなかったため，放課後はUKが日本語を教えていた[21]。

終戦後，母方の親族はUKとのそのキョウダイが日本に引き揚げることに強く反対したが，当局からの要請でUKだけが日本に行くことになったという。日本では，父とともに仕事をしていた移住者をたより，長崎に滞在した。UKは戦後中学校卒業まで日本に滞在したが，程なくしてパラオに帰還，その後フィジーとハワイの大学に進学し，医者の資格を取った。その後は信託統治領パラオ地区の議員，観光会社の役員などを歴任した。

UK は戦後パラオに戻ってからも，パラオ人から「日本人」と呼ばれることがよくあったというが，最近では差別的な扱いを受けることはなくなったという。UK は，日本人に対してもパラオ人に対しても，日本人の父の姓と日本式の個人名を名乗っている[22]。筆者のインタビューに対して，UK は混血児のことを「ニッケイ」「ハーフ」などと呼んだが，パラオ語の辞書にも収録されている「アイノコ」という用語を用いることには否定的であった。というのも「アイノコ」は日本統治期には「コノテーションがよくなかった」からであるという。また，UK は現在でも日本にいる父の親戚との交流を続けている。かれらがパラオに来ることはあまりないが，UK は 1 年に 1 度程度の頻度で日本にいる父の親戚のもとを訪問し続けているという。

【事例 2】SG（1920 年生，男性）

SG は父の戸籍には入れられずに，アイライ（Airai）村落の母のもとで養育された。コロールの公学校に在学中は，混血児であるがための差別を受けた記憶は特にないという。1935 年にコロール公学校補習科を卒業した後は，豆腐配達，南洋庁の「お茶ボーイ」（給仕）などの仕事に就いた。1939 年に自動車の技術の習得のためにサイパンに渡り，パラオに戻ってからはオートバイ 3 輪車の運転手，コロール島とバベルダオブ島を結ぶ連絡船の運転手を勤めた。

SG は日本人の父に関して多くを語らない。戦後，父との連絡は途絶え，現在でも日本にいる父の親戚との間に行き来はない。しかし，1960 年代後半以降，ペリリュー島出身の妻 TY（Ⅲ参照）とともに日本からの慰霊団の受け入れに深く関わった。このため旧軍人・軍属をはじめとして，パラオを訪問する日本人の間では顔が広かった。また英語教育が重視される戦後の教育環境のなかで，あえて娘の一人を日本に留学させたこともある。

SG は誰と対面するかによって名乗りの仕方を使い分けている。慰霊団と対面するときには，日本人の父の姓と日本式の個人名を名乗っているが，パラオ人に対しては，第一名に日本式の個人名，第二名に母方の親族に由来するパラオ名を名乗り，日本人の父の姓は名乗らない。SG は，混血児のことを「ニッケイ」などと呼ぶ一方で，慰霊団関係の知り合いには「ニホンジン」を自称することもあったという[23]。

SG は，母の出身村落であるアイライの伝統的首長の称号を二つ継承しており，パラオ社会内においても一定の名声を保持していた。2008 年 11 月に行われた SG の葬儀には，在留日本人や日本からの出席者も参列した。通常は近親者のみが棺を覗いて「最後のお別れ」を行うが，遺族の配慮で日本人の参列者にもこれを行う機会が与えられた。

【事例3】FM（1931年生，女性）

FMの父は，カイシャル（Ngchesar）村落に入植した沖縄出身者，母はカイシャル村落のパラオ人であった。カイシャルには日本人の入植村（清水村）もあったが，FMの父はパラオ人の集落の近くに住み，大工，木挽き，炭焼きなどの仕事を行っていた。FMは当初マルキョク公学校に通っていたが，通学に時間を要したため，コロールにいた母方の親族のもとからコロール公学校に通うようになった。卒業後はカイシャルに戻り，新設された清水村の国民学校に通った。公学校では差別を受けることはなかったが，国民学校では日本人の生徒から「島民」とはやし立てられ，石を投げられたことがある。だが「いくら『島民』といわれても学校の成績では日本人に負けなかった」というFMは，在学時に首席として表彰されたこともある。5人のキョウダイはみな父の戸籍に入っていたというが，国民学校に通ったのはFMのみであった。

FMの父が戦時中にパラオで死亡したこともあり，FMとそのキョウダイは終戦後日本に引き揚げることはなかった。それでも，FMは戦後も沖縄にいる父の親戚との交流を続けてきた。1969年には初めて沖縄を訪問し，70年代にはカイシャルに埋葬してあった父の遺骨を掘り出し，半分を沖縄へ分骨し，半分を自らが引き取っている。父の遺骨はコロールの自宅前に設置した個人墓に収めていたが，2008年にカイシャルの公共墓地に埋葬し直した。その傍らには，幼少時に亡くなったFMの息子の墓をはじめ，母方の親族の墓が多くある。

また，FMは戦後パラオを再訪するようになった日本人，とりわけカイシャルの清水村に入植していた人々との親交を深めていった。清水村の跡地は戦後放置され，樹木が生い茂っていたため，慰霊碑を建てる適当な場所がなかった。そこでFMは出身集落の伝統的首長に相談し，カイシャルの公共墓地の一角に慰霊碑を建設する手はずを整えた。FMは現在でも「清水会の慰霊碑は私が守っている」[24)]と自負している。FMは，混血児のことを「ハーフ（カースト）」「アイノコ」「ニッケイ」などと呼ぶ。また，FMは日本人に対してもパラオ人に対しても一貫して沖縄出身の父の姓と日本式の個人名を名乗っている。

ここで注目すべきことは，日本統治期に受けた教育，戦後の父の親戚との関係がそれぞれに異なるにも関わらず，かれらが共通してパラオ・サクラ会に参加しているということである。父の戸籍に入っていたUKは小学校から中学校へと進学し，一貫して日本人としての教育を受けてきたのに対して，非嫡出子だったSGは公学校に進学し，一貫して「島民」としての教育を受けてきた。FMは公学校にも国民学校にも就学した経験があり，「島民」としての教育も日本人としての教育も経験している。

また，父の親戚との関係に関していえば，UKとFMが関係を継続しているのに対して，

SG の場合は完全に途絶えている。UK と FM が父の姓を一貫して名乗っているのに対して，SG は日本からの慰霊団と対面するときにしか父の姓を名乗らない。父の遺骨に対する執着を持っているのは FM だけである。しかし，3 人とも戦後になって，戦前パラオに住んでいた日本人との関係を再構築していった点では共通性が認められる。その際に，パラオ・サクラ会は一定の役割を果たすとともに，異なる背景を持つ混血児を結びつけたと考えられる。

## V．親日家という言説

それでは，日本からの慰霊団にとって，パラオ・サクラ会はいかなる人々の集まりとして認識されたのであろうか。慰霊団の記録では，パラオ・サクラ会は UK の説明とは異なり，専ら「日系人」の「親日家」の集まりであると記述されている。例えば，1968 年に組織された，最初期にして最大規模の慰霊団であった「パラオ諸島慰霊団」（以下，1968 年の慰霊団）の報告書（日本サクラ会 1968）には，そうした見解が如実に示されている。

1968 年の慰霊団は，太平洋戦争中アンガウル島に従軍し，玉砕を免れて生還した元日本兵 ta の呼びかけで，第一次（1 月）と第二次（4～5 月）に分けて組織された。参加者は UK の協力で査証を取得してパラオを訪問[25]，パラオ・サクラ会の協力のもとで，収集した遺骨を収めた慰霊碑をペリリューとアンガウルに建立し，「戦没者名簿・戒名を観音像と共に」祀った。また，コロールの日本人墓地に慰霊碑を建立する便宜を図ること，慰霊団の帰国後は慰霊碑の維持管理を行うことなどを同会に依頼し，快諾されたという（日本サクラ会 1968：5）。慰霊碑の建立にパラオ・サクラ会が尽力したという点は，UK の証言と合致している。

しかし，報告書のなかではパラオ・サクラ会は専ら「日系人」の「親日家」の集まりであることが強調されている。1968 年の慰霊団の中心人物であった ta が，初めてパラオ・サクラ会の存在を知ったのは，同慰霊団が組織される数年前にパラオを訪問した際，混血児でパラオ地区の行政上の要職に就いていた YN から，「パラオには日本人二世が組織しているサクラ会という親日グループがある」と聞かされた時であったという（日本サクラ会 1968：8）[26]。パラオ・サクラ会の設立年月日は定かではないが，少なくとも 1968 年の慰霊団の訪問に先立って設立されていたと考えられる。

そして，ta はパラオ・サクラ会の会員が日本人戦没者の墓の清掃を行っていることに深い謝意を述べるとともに，かれらを日本人としての意識を強く持つ人々ととらえ，以下のように述べている（カッコ内筆者）。

> 彼等（パラオ・サクラ会の会員）は一時米国から警戒される程の親日家の集まりであり，戦後二十数年，日本人墓地，無名戦士の墓地の清掃を続けていると言う世にも

稀なグループであり，大和魂を失っていない，日本の伝統を守り続けている純粋な人々である（日本サクラ会 1968：8)。

ta 以外の参加者も，パラオ・サクラ会の会員から受けた待遇に謝意を述べると同時に，かれらを日本へ辿れる出自を強く意識する人々と評している。例えば，同会の会員が日本人墓地の清掃を行うのは，かれらが「パラオ島民としてではなく，日本人であったと云う誇りを今もって忘れて居ない」ためであり（日本サクラ会 1968：18)，かれらが流暢に日本語を話すのは，「吾々以上に，日本人であった誇りを持って」いるためであるなどと評している（日本サクラ会 1968：29）[27]。

UK が述べたように，確かにパラオ・サクラ会は日本からの慰霊団を受け入れることを目的のひとつに掲げていた。また，「日本人」と呼ばれて差別された経験から，かれらがほかのパラオ人とは異なった日本意識を持っていたことは確かである。だが，慰霊団の受け入れは，混血児の持つ出自や親日感情からではなく，肉親捜しや相互扶助など混血児側の現実的な必要性との符合から行われたと考えられる。しかし，1968 年の慰霊団の報告書では，パラオ・サクラ会の実像が歪曲され，即座に親日感情と結びつけられている。日本からの慰霊団にとって，慰霊碑の建立に協力し，日本人墓地の清掃を行ってくれるパラオ・サクラ会の混血児は専ら親日的な人々であり，日本人の分身であるかのように認識されたのである。

## Ⅵ. 考察—パラオ人と日本人の狭間で

いままでの議論を整理すると以下のようになる。日本統治下のパラオで誕生した混血児の多くは非嫡出子で，現地人の母のもとで養育され，「島民」向けの公学校に通っていた。同時に，混血児のなかには日本人の父の戸籍に入れられ，現地の日本人子弟向けの小学校に通う者もいた。日本人移住者が引き上げた戦後，ほとんどの混血児は母とともに現地に残されたが，父の戸籍に入っていた混血児のなかには，まだ見たことがない内地への「引き揚げ」を余儀なくされる者もいた。戦前から戦後にかけて混血児が辿った道筋は様々であったが，1960 年代半ばに，日本からの慰霊団の受け入れを目的のひとつに掲げて設立されたパラオ・サクラ会は，それまで集合的な行動をとったことがなかったパラオの混血児を相互に結びつける役割を果たした。日本からの慰霊団は同会を専ら「日系人」の「親日家」の集まりと認識したが，実際のところは，混血児の側も肉親捜しなどの現実的な必要性から，日本との関係を再構築することに強い関心を抱いていた。

最後に，パラオ人と日本人の狭間におかれた混血児のエスニック・アイデンティティを検討しておきたい。

## 1. 母系的社会における混血児の位置

まず，母系的社会における混血児の位置を検討しておく必要がある。旧南洋群島には，親族集団に対する個人の帰属が母系的な出自によって定められる社会が多く存在する。パラオの親族集団（*kebliil*）も，女性成員の子孫（*ochell*）を中心に男性成員の子孫（*ulechell*）も加わって構成される準母系的な出自原理によって構成される（青柳 1985：32；Smith 1983）。一般に，こうした社会においては，混血児のように父が外国人であっても，地位や財産の継承に大きな支障をきたさないとされる。むしろ，旧南洋群島の伝統的首長の家系は，外国人を積極的に受け入れてきたという指摘もある（小林 2007）。混血児は戦後，日本人の父の不在や，日本への引き揚げと再度の帰還という生活基盤，社会基盤の変化に直面しても，母方の親族をセイフティーネットとして，大きな障壁もなく養育され，社会的地位を築き上げることが可能であったと考えられる。

しかし，旧南洋群島の混血児が，現地社会のなかで非混血児と全く同じ位置性を無条件に確保できたとも考えにくい。UK の事例から明らかなように，小学校で教育を受けた混血児は，戦後においてもパラオ社会内で「日本人」と呼ばれて差別された経験がある。また，母系的な社会であっても，父からの地位や財産の継承は生活基盤を確保する重要な手段のひとつであった。例えば母方の親族集団に利用可能な土地がない場合は，父の土地を用益ないし相続することも可能である。混血児はこうした父からの地位や財産の継承という点では不利な立場に置かれた[28]。一見して母系的な社会のセイフティーネットに守られ，他のパラオ人と変わりなく社会生活を送っているようにみえる混血児も，一定の苦難の経験を余儀なくされてきたといえる。そうした混血児たちを共通の目的のもとにある程度まとめあげたのがパラオ・サクラ会であったと考えられる。

## 2. 日本人墓地との関係

言い換えれば，パラオの混血児は，母系的な社会のセイフティーネットを通じて，日常的にはパラオ人として個別に生活を送り，無徴化されている。だが，同時に，パラオ・サクラ会の活動を通じて，一時的ではあるが集合的に日本に辿れる出自を想起し，「ニッケイ」としての自己を有徴化しているのである。そうすることによって，かれらは突如とした統治国の変更によって戦後自らが直面した様々な困難を共有し，克服しようとしている（cf. Poyer et al. 2004: 308）。

それでは，サクラという名称が象徴的に示すとおり，パラオ・サクラ会は日本人移住者の子孫すなわち「ニッケイ」としての明確なエスニック・アイデンティティを保持する人々の集まりといえるであろうか。実はそうともいえない。確かにパラオ・サクラ会は共通の目的を掲げており，混血児をほかのパラオ人から区別する機会を提供しているが，そのメンバーシップの規定は厳格ではなかった。同会にはすべての混血児が参加しているわけで

はなく，一部のパラオ人や在留日本人が参加するという柔軟性がみられた。

また，確かにUK，SG，FMはともに自分たちのことを「ニッケイ」と呼ぶ場合があったが，かれらはパラオ社会内では母方の親族集団に帰属して地位や財産を継承している。パラオ・サクラ会は，慰霊団が誤解したように「親日家」の集まりでもなければ，日本人としての意識を強く抱いた「日系人」の集まりでもなかった。同会は，混血児を中心に共通の目的を達成するために創られた緩やかなアソシエーションである。SGの名乗り方に象徴されるように，会員は特に日本人との対面状況―調査者に対してにせよ，慰霊団に対してにせよ―において「ニッケイ」を自称している。このように，パラオ人と日本人の狭間に置かれた混血児のエスニック・アイデンティティは一枚岩ではない。かれらは非混血のパラオ人と全く同じでもなければ，「ニッケイ」としての厳格なエスニック・アイデンティティを一貫して保持しているわけでもない（cf. Poyer et al. 2004）[29]。

こうした混血児のエスニック・アイデンティティのゆらぎを示す事例として，一部の混血児の埋葬場所の特殊性があげられる。パラオでは，死者の埋葬場所は父方と母方の親族集団の交渉によって決定される（遠藤 2002：129）。現在では日本統治期に普及した公共墓地への埋葬が一般的であるが，首長位称号保持者などは親族集団との結びつきを明確化するために，石積み状の親族集団の墓（*odesongel*）―植民地統治以前は人々の居住地と親族集団の墓とは隣接していた―に埋葬されることもある（cf. 飯髙 2006b）。

ほとんどの混血児は他のパラオ人と同様に，公共墓地か親族集団の墓に埋葬されている。UKによれば，パラオ・サクラ会の創設者に名を連ねていたADやASは生前，日本人墓地に埋葬されることを望んでいたが，双方とも伝統的首長の称号を継承していたこともあり，ADはコロールの公共墓地に，ASはアイライの親族集団の墓に埋葬された。また，UKは生前SGが「日本人墓地は家のない人のための場所」といっていたのをよく覚えているという。SGは慰霊団のまえでは自らを「ニホンジン」と名乗るほどであったが，パラオ人の前では父の姓は名乗らなかった。そして，二つの首長位称号を保持していたSGが埋葬された場所は日本人墓地ではなく，母の出身村落アイライにある親族集団の墓であった。

同時に，混血児のなかには日本人墓地に埋葬された者も少数いる。パラオ・サクラ会の創設者であったMRやYNをはじめ，かれらの子どもがそれぞれ1人，ADの妻（混血児）と子ども1人，同じくASの子ども2人，そのほかにも数名の混血児が埋葬されている。このうちMRは首長位称号を保持していたが，パラオ・サクラ会の創設者の1人としてのここに埋葬されることになったという。ADやASの子どもが埋葬された経緯は定かではないが，日本人墓地への埋葬を望んでいた父の意向と何らかの関係があったと推測される。パラオでは，人の帰属を決定するうえで埋葬場所は重要な要素である。一部の混血児が「家のない人のための場所」ともいわれる日本人墓地に埋葬されたことは，パラオ人として日

常生活を送ってきた混血児の潜在的な属性すなわち「ニッケイ」が，遺体処理の段階になって顕在化したことを示している。

## Ⅶ. おわりに

日本統治期を知る旧南洋群島の人々は，現在の時点で戦前の植民地経験を肯定的に意味づけることもある。例えば，様々な経済開発が行われた日本統治期と比較しながら，アメリカ統治下の低開発を嘆いたり，援助金によって成り立つ国家の現状を批判したりする者もいる。また，日本語を活かして就業していた過去を懐かしむ者もいる。日本社会において，こうした認識は親日感情の表れとされることがしばしばあるが（e.g. 藤岡 1999），むしろ，全く異なる統治体制が敷かれた戦後における過去の解釈，再解釈にほかならない。

とりわけパラオの混血児は，親日家という言説に巻き込まれやすい。日本の慰霊団の報告書や通俗的なメディアのなかで，かれらは「日本人」としての意識を保持する，無類の「親日家」であると表象されてきた。日本の敗戦に伴う社会体制の変更により数々の苦難を経験してきたパラオの混血児が，日本統治時代を美化して語り，再訪した日本人を厚遇したことは想像に難くない。しかし，それは親日感情のあらわれとはいえない。かれらもまた，戦後の歴史過程のなかで日本統治経験を解釈，再解釈しているのである。パラオの混血児は，パラオ人として日常生活を送りつつも，途切れかけた日本との関係を再構築する必要性から，一時的に「ニッケイ」としての意識を顕在化させているのである。

1960年代半ばから40年あまりにわたり活動してきたパラオ・サクラ会も，現在では会員の高齢化が進み，会員不足が深刻な問題となっている。毎月一度行われていたミーティングや会費の積み立ては，ここ数年は行われていない。会員が行っていた日本人墓地の清掃も，コロール州の要職に就くADの孫に委託されている。混血児と比較して，その子どもの第3世代以降の人々は，同会の活動への関与が希薄になってきているという。日本からの慰霊団も高齢化が進み，パラオを訪問できなくなる人も増えてきた。こうした現状を前にして，UKは「パラオ・サクラ会の目的はもう果たしてしまった」と語る。事実，慰霊団は慰霊碑の建立を成し遂げ，混血児や「残された移住者」の肉親捜しの手は尽くされ，戦後のパラオ社会のなかで混血児も確たる地位を既に築いている。

日本人の父を持つ混血児が他界し，かれらの子どもの第3世代，孫の第4世代へと下るにつれて，パラオにおいて一時的にでも「ニッケイ」が想起される機会は失われるのであろうか。確かにパラオの「ニッケイ」は世代を超えて継承されていくような性格のものではないが，何らかのかたちで今後も想起され続けると考えられる。現に，一部の混血児とその子どもが日本人墓地に埋葬されたことは，かれらの子孫にとっては日本に辿れる出自を想起する機会を否応なしに与えられたことになる。これは「ニッケイ」の物象化にほかならない。パラオの混血児とその子孫は，自らの意思如何に関わらず，今後も「ニッケイ」

としての自己を一時的にでも有徴化する瞬間に遭遇することになろう（cf. Stoler 2006; Salesa 2006）。

## 謝辞

パラオ共和国での現地調査は，2002年7月から2004年8月および2008年10月から11月にかけて実施した。調査にあたっては，公益信託澁澤民族学振興基金「大学院生等に対する研究活動助成」（平成14年度）から助成を受けました。また，パラオ国立博物館（Belau National Museum），芸術文化局（Bureau of Arts and Culture），およびUK, SG, FMの各氏をはじめとするパラオ・サクラ会の方々にご協力いただきました。末筆ながら記してお礼申し上げます。

## 注

1) 南洋群島に居住していた日本人は海外移民としては扱われなかった。本論ではかれらを「日本人移住者」ないし「移住者」と表記する。
2) かれらの大統領としての在任期間は以下の通り。トシヲ・ナカヤマ（1979～1987年），アマタ・カブア（1979～1996年），クニヲ・ナカムラ（1993～2001年）。アマタ・カブアは在任中の1996年に，トシオ・ナカヤマは2007年に死没した。
3) ミクロネシア諸国に対するODAの意義のひとつとして，外務省は「数多くの日系人が政・財界で指導的な役割を果たしており，経済的自立の達成に向けた我が国援助への期待」が高いことをあげている。以下の外務省のホームページ参照。http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/04_databook/07_ocean/ocean_14/ocean_14.html#（2008年10月1日現在）。
4) 前山隆は，ブラジルで調査者としての自己がまず「日本人」と認識されたこと，また自身が日系人社会に深く関わり，日系人女性とも結婚したことなど，ブラジルにおける「日本人」としての位置性が，自身のブラジル日系人の研究に大きな影響を与えていることを示唆している（前山 2001：383-384）。
5) 現地名はトール（Tol）島。
6) 小林は「日本人の血を引く人々」を便宜的に日系人と定義している（小林 2007：96）。
7) 「カナカ」という民族分類は，当時差別的な含意が込められていたこと，現在では民族誌的な妥当性が認められていないことから，本稿では括弧付きで表記する。
8) 軍政期初期には，日本人子弟と同じ小学校で「島民」の教育を行う方針であったが，1918年に設立された島民学校，その後身で1922年に設立された公学校では日本人子弟と分離された（南洋群島教育会 1938：137）。
9) とりわけ皇民化が掲げられる1930年代後半以降，公学校における日本語の習得，修

身の授業を通じた天皇中心の国家観の注入が重視されるようになった（今泉 1996：606）。

10）日本統治期末期になると，マリアナ諸島のチャモロの知識人が，「島民」と呼ばれるのを嫌うと同時に，劣悪な生活状態に置かれた沖縄出身の労働者らに差別意識を持つようになったとの報告もなされている（e. g. 泉井 1941：68）。沖縄出身者はチャモロから「ジャパン・カナカ」と呼ばれることもあった（冨山 2006：103）。

11）反対に，日本人女性が現地人男性と性的関係を持つことは統治者によって忌避されていたため，数例の例外を除いて双方の間に混血児は誕生しなかった。小林の調査では，父が「島民」男性で母が日本人女性という混血児の事例は，サイパンで 4 例，パラオで 1 例確認された。いずれも「島民」男性が勉学や療養のために内地に長期滞在するなかで，日本人女性との関係が出来た事例であるという（小林 2007：90-91）。

12）1940 年代には南方戦線に赴くために駐留する軍人・軍属がパラオにも滞在していた。

13）南洋庁コロール公学校『本校概況書』（1933 年 4 月）。同資料は南洋群島各地を踏査した矢内原忠雄が現地で収集した資料のひとつで，琉球大学付属図書館「矢内原忠雄文庫」のデジタルアーカイブズで公開されている。以下の URL を参照。http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/yanaihara/details.php?clsid=10&bid=082&image_id=&current_id=1&fac=1（2008 年 10 月 1 日現在）。なお，コロール公学校『本校概況書』のほか，教育関係の資料は今泉（1996）により詳細に分析されている。

14）1930 年の時点でペリリューには 12 人，マルキョクには 30 人，ガラルドには 8 人の日本人移住者が居住しているだけであった（南洋庁 1932：205）。その後，ペリリューでは南洋興発株式会社による燐鉱採掘が行われたほか，1930 年代末には飛行場をはじめとする軍事施設の建設が着手されたために，多数の日本人が流入した。

15）日本統治期末期には，文明に覚醒したマリアナ諸島のチャモロが「日本人」としての意識を抱くようになり，日本国籍の取得を望んでいると表象されることがあった（e. g. 野口 1941：32-37）。

16）TY は学業の面では日本人と同等かそれ以上とされながらも，混血児であるがために日本人との結婚が望めず，苦悩する存在として表象されている（能仲 1990：86）。

17）敗戦直後は，朝鮮半島，沖縄，台湾，中国の出身者に関しては，引き続いての現地滞在が認められる方針であったが，沖縄出身者以外の残留希望者はごく僅かであった。また，当初は残留希望者が多かった沖縄出身者も，テニアン島への集住計画の反発もあって希望者が激減し，結局すべてが引き揚げを命じられた（Richards 1957: 34-41; 浅野 2007：308-315）。

18）現地召集を受けたパラオ人男性はほかにもう一名いたが，同時コロールとの交通の便が悪かったバベルダオブの北部の村落ガラルド（Ngaraard）に居住していたため，パ

ラオ・サクラ会の活動に参加する頻度は少なかったという。

19）沖縄パラオ会は，2007年10月，会員の高齢化と役員適任者不在のために解散した。

20）UKによれば，パラオ・サクラ会の設立時には貿易会社を経営していた在留日本人1名が参加していただけだった。

21）UKの弟は現在では日本語は話せないが，設立時からパラオ・サクラ会の会員に名を連ねている。

22）現在のミクロネシア地域では，混血児ないしその子孫でなくても，日本式の姓名を流用する者が多く存在する。そのため，日本式の姓名の使用は，混血児ないしその子孫であることを示す指標とはならない。

23）太平洋戦争期にアンガウル島に従軍した経験のある，現在パラオ在住の日本人（80代，男性）からの聞き取りによる。

24）清水会とは清水村に入植していた人々が戦後組織した同窓会のこと。慰霊碑はこの清水会の名の下に建立された。

25）一行はグアム滞在中に，丁度サイパンにいたUKに連絡を取り，査証取得のための援助を求めた。UKは自らが経営するパラオのホテルを慰霊団の宿泊施設に充て，現地での滞在先を確保することで，査証の取得に成功したという（日本サクラ会 1968：14-15）。

26）taは第一次の慰霊団から帰国後程なくして，参加できなかった人々も交えて東京で懇親会を開催し，慰霊祭の報告，今後の活動の相談などを行った。そして，パラオでの慰霊活動を主たる目的としたこの集まりを，パラオ・サクラ会にちなんで日本サクラ会と命名している（日本サクラ会 1968：176）。

27）また，グアムでは米国統治を経験してきた先住民チャモロが「対日感情は良いとは決して云えない」のに対して，パラオからグアムに渡った混血児は日本人をよく受け入れてくれたと報告している参加者もいる（日本サクラ会 1968：33）。

28）例えば，アメリカ統治期初期の段階で，FMは，既に死亡していた沖縄出身の父が開墾した土地を相続することに強い関心を抱くと同時に，母の再婚相手であるパラオ人男性に土地の権利が奪われないように警戒していたという。

29）生物学的な出自よりもむしろ，個人を取り巻く環境や行動に基づいて柔軟に定められる太平洋島嶼民の文化的アイデンティティのあり方に関しては，ジョセリン・リネキンとリン・ポイヤー（Linnekin and Poyer 1990）に詳しい。また，太平洋戦争による甚大な被害，突如とした統治国の変更によって，戦後，ミクロネシアの人々は自らのアイデンティティをグローバルな観点から位置づけるようになったという指摘もある（Poyer et al. 2004: 308）。この指摘は本稿の問題関心と多くを共有している。人々にとっての戦争体験の検討とあわせて，今後の課題としたい。

## 史資料

泉井久之助 1941 「サイパン滞在記」『太平洋』4(8)：60-77.

沖縄パラオ会 1993 『会誌　第10回総会記念　第2号』沖縄パラオ会.

南洋群島教育会 1938 『南洋群島教育史』南洋群島教育会.

南洋庁 1932 『昭和5年南洋群島島勢調査書　第一巻　総括編』南洋庁.

南洋庁 1937 『第五回　南洋庁統計年鑑』南洋庁.

南洋庁 1941 『第九回　南洋庁統計年鑑』南洋庁.

南洋庁長官官房 1932 『南洋庁施政十年史』南洋庁長官官房.

日本サクラ会　1968 『サクラに結ばれて—パラオ諸島慰霊団の記録』日本サクラ会.

野口正章 1941 『今日の南洋』坂上書院.

能仲文夫 1990（1934）『南洋紀行—赤道を背にして』南洋群島協会.

Richards, Dorothy 1957 *United States Naval Administration of the Trust Territory of the Pacific Islands.* Office of the Chief of Naval Operations.

## 参照文献

青柳真智子 1985 『モデクゲイ—ミクロネシア・パラオの新宗教』新泉社.

浅野豊美 2007「南洋群島からの沖縄人引揚と再移住をめぐる戦前と戦後」浅野豊美（編）『南洋群島と帝国・国際秩序』慈学社出版，297-344頁

飯髙伸五 2006a 「ガラトゥムトゥンの踊る安里屋ユンター—パラオ共和国ガラスマオ州における『アルミノシゴト』の記憶」『民俗文化研究』7：104-120.

飯髙伸五 2006b 「パラオの葬儀における首長位称号の客体化—屋敷地への埋葬と食物の分配を事例として」『社会人類学年報』32：127-143.

飯髙伸五 2009（予定）「経済開発をめぐる『島民』と『日本人』の関係—日本統治下パラオにおける鉱山採掘の現場から」日本オセアニア学会（編）『オセアニア学』京都大学出版会.

今泉裕美子 1996「南洋庁の公学校教育方針と教育の実態—1930年代初頭を中心に」『沖縄文化研究』22：567-618.

今泉裕美子 2005 「南洋群島引揚げ者の団体形成とその活動—日本の敗戦直後を中心として」『史料編集室紀要』30：1-44.

遠藤　央 2002 『政治空間としてのパラオ—島嶼の近代への社会人類学的アプローチ』世界思想社.

小熊英二 1995 『単一民族神話の起源—「日本人」の自画像の系譜』新曜社.

黒崎岳大 2007 「遺骨を媒介にした共同体意識の形成—マーシャル諸島における遺骨収集活動と遺骨をめぐる文化的意味の変容」『日本オセアニア学会NEWSLETTER』89：

11-23.

高知新聞社（編）　1998　『夢は赤道に―南洋に雄飛した土佐の男の物語』高知新聞社.

小松和彦 2001　「南洋に渡った壮士・森 小弁―「南洋群島」以前の日本・ミクロネシア交流史の一断面」篠原 徹（編）『近代日本の他者像と自画像』柏書房，195-233 頁.

小林　泉 2007　『ミクロネシアの日系人―日系大酋長アイザワ物語』太平洋諸島地域研究所.

坂野　徹 1997　「人類学者たちの“南”（Ⅱ）―戦前日本におけるミクロネシア人研究をめぐって」『科学史研究』201：9-18.

坂野　徹 2005　『帝国日本と人類学者―1884-1952 年』勁草書房.

セイソン，マルウ，L. 2001　『草の根から　クニヲ・ナカムラ―31 年間の公人としての人生を振り返って』（グアム新聞社・樋口和佳子訳）パラオ共和国.

太平洋諸島地域研究所 2003　『ミクロネシアの日系人―ミクロネシア地域の日系人に関する調査研究』太平洋諸島地域研究所／外務省委託.

太平洋諸島地域研究所 2004　『ミクロネシアの日系人―ミクロネシア地域の日系人に関する調査研究（2）』太平洋諸島地域研究所／外務省委託.

冨山一郎 2006　『増補　戦場の記憶』日本経済評論社.

藤岡信勝 1999　『呪縛の近現代史―歴史と教育をめぐる闘い』徳間書店.

前山　隆 2001　「ブラジルで日本人を人類学する―『エスニック日本論』への道」『民族学研究 』65(4)：276-391.

Linnekin, Jocelyn and Lin Poyer 1990 “Introduction.” In J. Linnekin and L. Poyer (eds.) *Cultural Identity and Ethnicity in the Pacific.* Honolulu: University of Hawaii Press, pp. 1-16.

MARC (Micronesia Area Research Center) 1986 *An Oral Historiography of the Japanese Administration in Palau* (Final Report Submitted to Japan Foundation Institution Project Support Program). Manilao: University of Guam.

Peattie, Mark 1988 *Nan'yō: The Rise and Fall of the Japanese in Micronesia, 1885-1945.* Honolulu: University of Hawaii Press.

Poyer, Lin, Suzanne Falgout and Laurence Craucci 2004 “The Impact of the Pacific War on Modern Micronesian Identity.” In Victoria S. Lockwood (ed.) *Globalization and Cultural Change in the Pacific Islands.* New Jersey: Person Prentice Hall, pp. 307-323.

Salesa, Damon 2006 “Samoa's Half-Castes and Some Frontiers of Comparison.” In Ann L. Stoler (ed.) *Haunted by Empire: Geographies of Intimacy in North American History.* Durham and London: Duke University Press, pp. 71-93.

Smith, DeVerne R. 1983 *Palauan Social Structure*. New Brunswick: Rutgers University Press.

Stoler, Ann L. 2006 "Intimidations of Empire: Predicaments of the Tactile and Unseen." In Ann L. Stoler (ed.) *Haunted by Empire: Geographies of Intimacy in North American History*. Durham and London: Duke University Press, pp. 1-22.

（いいたか　しんご・日本学術振興会特別研究員 PD／筑波大学）

## An Association of Half-Japanese and Half-Palauans in Micronesia: The Palau Cherry Blossom Association (*Palau Sakura Kai*)

Shingo IITAKA

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

/ University of Tsukuba

(Social Anthropology/ Pacific History)

**Keywords**: Japanese Immigrants, Half-Japanese and Half-Palauans, School Education, Spirit-consoling Service, Palau Cherry Blossom Association

This paper aims to examine how the mixed-bloods in Micronesia (half-Japanese and half-Micronesians) were treated under the Japanese administration and how they have recognized their Japanese descent in the postwar period up until now. Especially, the cases in Palau, which was the center of Japanese administration and where a considerable number of the mixed-bloods were born, are investigated. Almost all of the mixed-bloods had native mothers and Japanese fathers, who were immigrant workers, merchants, fishermen, government officials, military men and so forth. Most of them were illegitimate children, brought up by mothers and their relatives, and also attended the public schools (*kōgakkō*) for native islanders (*tōmin*). At the same time, a few of them were legitimate children, brought up by their parents and attended the separate elementary schools (*shōgakkō*) for Japanese children. Rarely did mixed-blood children attend school in mainland Japan. Some Japanese writers and scholars, especially in the 1940s, insisted that these mixed-bloods should be brought up as Japanese lest

they should be discriminated by both Japanese immigrants and indigenous people or lest they should disturb the identity of Japanese people.

After the Pacific War, all of the Japanese immigrants were forced to evacuate from Micronesia. Most of the mixed-bloods were left in their islands with their mothers, while some legitimate children went to Japan with their fathers. Some of them have been in Japan ever since, while others returned to their islands because of their difficulty in adjusting to Japan. In spite of the drastic changes in their social life, many mixed-bloods led successful life as businessmen, politicians, and traditional chiefs in postwar Micronesia. As time passed, the mixed-bloods tried to reconstruct their relationship to Japan. Some mixed-bloods in Palau established the Palau Cherry Blossom Association (*Palau Sakura Kai*) in the middle of the 1960s. The main aims of this association were to receive Japanese groups visiting Palau for spirit-consoling services (*ireidan*), to assist mixed-blood children to search for their fathers or paternal relatives in Japan, and to help each other as the mixed-bloods were faced with some difficulties resulting from the separations of their families.

Even though the association has been often represented as a pro-Japanese or an ethnic Japanese group in the records by Japanese visitors, it does not advocate any political views. Its membership is so loose that some native Palauans and Japanese residents in Palau have joined it. Therefore, the Palau Cherry Blossom Association does not contribute to the fostering of a rigid or exclusive sense of Japanese identity. Generally, the mixed-bloods spend their daily lives as Palauans who are the members of ambi-matrilineal kin groups (*kebliil*), without clear and rigid ethnic identity as Japanese. On the other hand, they are not the same as ordinary Palauans, as some of them have been buried at the Japanese cemetery in Koror. The mixed-bloods in Palau collectively remember their Japanese origin, if temporarily, in such an occasion as a memorial service held by Japanese groups, and thus they share their experiences of suffering after the Pacific War with Japanese.